

鎌倉散策の資料

鎌倉の歴史

平成二十六年二月一日作

鎌倉の歴史

奈良時代 (710-794 八十四年間)

奈良時代、鎌倉都の所在する相模国の国府は現在の平塚市に、国分寺は現在の海老名市にあったと考えられている。「鎌倉」の名が記された最も古い文献は、「古事記」とされる。

日本最古の歌集『万葉集』には、「ま愛しみさ寝に吾は行く鎌倉の美奈の瀬川に潮満つなむか」「鎌倉の見越の崎の岩崩の君が悔ゆべき心は持たじ」「薪樵る鎌倉山の木垂る木をまつと汝が言はば恋ひつつや在らむ」と鎌倉が詠まれている。また、正倉院文書にも「鎌倉郡鎌倉郷」が登場する。

一九八五年（昭和六十）には、御成町の御成小学校の敷地の今小路西遺蹟から「天平五年」（七三三年）と記された木簡が発見されており、鎌倉郡衙（郡の役所）が所在していたことが確認された。

この時代に建立されたという伝承を持つ寺社に、長谷の甘縄神明神社や長谷寺、二階堂の杉本寺がある。



甘縄神明神社



長谷寺



杉本寺

平安時代 (794-1185 二百九十年間)

平安時代に建立されたという伝承をもつ寺社には、手広てびろ

青蓮寺、坂ノ下の御霊神社、二階堂の荏柄天神社がある。御しやうれんじ

霊神社は、鎌倉権五郎景政（正）を祭神とする。かまくらごんごろうかげまさ

源氏と鎌倉の関係は、源頼義からはじまる。みなものよりよし

源頼信・頼義父子が、一〇三一年（長元四）、房総半島みなものよりよし

の平忠常の乱を平定したさい、それ以前に乱の平定に失敗たいらのただつね らん

していた桓武平氏の平直方は、源頼義の武芸を認め、頼義かんむへいし たいらのなおかた

を婿に迎え、鎌倉の屋敷を譲ったという。これによって直方むこ

に従属する相模の武士たちも、頼義と緊密な関係を結ぶこじゅうぞく さがみ よりよし

とになったのである。

その後、陸奥守に任じられた頼義は、一〇六二年（康平五）、むつのかみ

長年にわたって抵抗を続けた陸奥の豪族安倍氏を討ち（前九あべ うち ぜんく

年合戦）、翌年、鎌倉の由比郷に由比若宮（現在の元八幡ねんがっせん ゆいごう ゆいわかみや

を創建した。これは頼義が奥州におもむくにあたり、勝利おうしゅう

を祈願した源氏の氏神である山城（京都府）の石清水八幡宮うじがみ やましろ いわしみず

を勧請したものである。かんじよう

一〇八一年（永保元）、この由比若宮の社殿を修理したのゆいわかみや

が、頼義と平直方の娘との間に生まれた義家である。義家よりよし たいらのなおかた よしいえ

は奥羽地方の豪族清原氏の内紛に介入して出兵した（後三年おうう きよはら

合戦）が、『奥州後三年記』には、この時、鎌倉権五郎景政かまくらごんごろうかげまさ

も義家に従って出陣し、活躍した話が見える。合戦後、朝廷よしいえ

から恩賞が出なかったため、義家は従軍した坂東武者たちから私財しざいから恩賞を与え、彼らの信頼を深めたといわれている。

一一四四年（天養元）、義家の曾孫源義朝みなものよしともが、現在の

藤沢・茅ヶ崎市一帯にあたる大庭御厨おおばのみくりや（鎌倉権五郎景政が寄

進したという伊勢神宮の莊園しょうえん）へ侵入するという事件が起

こっている。当時、義朝は「鎌倉之楯かまくらのたて」（居館きよかん、現在の壽福寺

付近）を拠点きょてんに東国で活躍していたのである。義朝が鎌倉

を委ねた長男義平よしひらは、三浦郡を本拠とする有力武士三浦義明

の娘との間に生まれた子で、「鎌倉悪源太かまくらあくげんた」と称したと伝え

られている。

一一五六年（保元元）、京都では後白河天皇と崇徳上皇ごしらかわてんのう すたけじょうこう

さらには摂関家せつかんけ（藤原氏）内部の対立から保元の乱が起こつ

た。この時、義朝よしともは平清盛たいらのきよもりとともに天皇方について勝者と

なったが、三年後の一一五九年（平治元）十二月には、後白

河院かわいんの近臣藤原信頼のぶよりと結んで兵を挙げ、清盛軍と戦つて惨敗さんぱい

を喫し、義朝主従しゅじゅつは東国を目指して敗走する。父義朝は、

逃亡先の尾張で謀殺され、兄義平は京都に潜伏せんぷくしていたとこ

ろをみつけられ、処刑された。源頼朝みなものよりともにとっては初陣で

あったが、父や兄たちとともに東国をめざした。しかし、

途中で一行いっけいとはぐれてしまい、一一六〇年（永暦元）二月に

近江国おうみで平清盛の弟頼盛よりもりの郎等平宗清ろつしやうに捕らえられてしま

う。処刑されるべき頼朝の助命を清盛に嘆願したのは、清盛
ままはいけのぜんに
の継母池禪尼であった。そして、頼朝の配流先は伊豆と決定
いず
された。



御霊神社



彦柄天神社

鎌倉時代 (1185-1333) 約150年間

一一八〇年（治承四）八月、源義朝の子頼朝が配流先
みなものよしとちも
の伊豆国（静岡県）で打倒平氏の兵を挙げた。先の平治の乱
へいじ
のさいに捕らえられ、伊豆へ流されてから二十年後のことであ
いしばしやま
った。頼朝は、当初の石橋山の合戦で平氏方の大庭景親（鎌
かげまさ
倉景政の子孫）に敗れはしたものの、海路、安房國（千葉県）
あわ
に渡り、房総地方で千葉氏や上総氏を味方につけた。武蔵国
かずさ
（東京都・埼玉県・神奈川県東部）をへて鎌倉に入った頼朝
よりとちも
は、同年十二月、新築の大倉御所（現在清泉小学校校地）に
おおくらごしよ
移り、関東の武士たちから「鎌倉の主」（吾妻鏡）と仰がれ
ぬし
た。頼朝のもとへの彼らの参集は、父祖以来の清和源氏との
せいわげんじ

つながりもあるが、なによりも平氏政権下で、たがいに勢力争いをくりひろげていた武士団によって、頼朝が新たな権威とみなされたからである。

一一八五年（元暦二）、平氏を滅ぼした頼朝は、四年後には彼と不和となつて奥州平泉（岩手県）にかくまわれていた弟義経を藤原泰衡に討たせ、ついで泰衡を滅ぼしたのち（奥州合戦）、一一九二年（建久三）には征夷大將軍に任じられた。また頼朝は、各国に御家人を統率する守護を設置し、没収した敵方の武士の領地に地頭を置いた。頼朝の鎌倉入り以後、同地を本拠地とする武家政権の鎌倉幕府は、こうして成立していった。

鎌倉は、武家政権の中心地として、一三三三年（元弘三）に北条氏の嫡流の家督である得宗（北条義時の法名徳崇に由来する）の北条高時らが滅亡するまでの約百五十年間繁栄した。頼朝が鎌倉を選んだ理由は、源氏と深いつながりを持ち、一方が海にひらけ三方が山に囲まれた防禦に適した地形であることなどがあげられる。頼朝は、由比若宮を小林郷に移し、鶴岡八幡宮を町の中心に据えて、若宮大路を整備した。また、御家人を統率する侍所、政務を担当する公文所（のちに政所の一部局となる）、訴訟を担当する問注所が設置され、大倉御所の周辺には御家人の居館が配置された。そのほか宗教関係では、頼朝によって、父義朝の菩提を弔う

ための勝長寿院しょうちようじゆいんと内乱の戦死者を鎮魂するための永福寺ようふくじが建立こんりゆうされている。

一一九九年（建久十）に頼朝が死去し、二代將軍となった長子頼家は、妻の父である比企能員ひきよしかずとの関係を強め、幕政の主導権をにぎろうとする祖父の北条時政きたけときまさや母の北条政子と対立した。このため一二〇三年（建仁三）、時政は比企氏を滅ぼすとともに、頼家を將軍職から引退させ、翌年、幽閉先の伊豆の修禪寺しゆぜんじで暗殺した。

頼家に代わって弟の実朝さねともが三代將軍になると、母の政子と叔父の北条義時ほうじようよしときが政治を補佐した。政所の別当（長官）で、

執権と呼ばれた父時政のあとを継いだ義時は、一二一三年（建暦三）、侍所別当の和田義盛を滅ぼして（和田合戦）、両別当を兼ね、確実に地位を固めていった。

一二一九年（建保七）、前年に右大臣に任じられた將軍源実朝みなもとのさねともが、鶴岡八幡宮で行われた右大臣拝賀式の際、甥の公暁（頼家の子）によって暗殺されるという大事件が起こった。事件の黒幕としては、公暁を將軍職につけて北条氏に託てかわろうとした公暁の乳母の三浦義村説、源氏の断絶をはかった北条義時説などがある。

実朝暗殺により、源氏將軍が三代で断絶したあと、「尼將軍」と呼ばれ、幕府の実質的指導者であった北条政子は、將

軍後継者として頼朝の遠縁にあたる藤原（九条）道家の子三寅（のち頼経）を鎌倉に迎えた。実朝は、藤原定家に師事して和歌に親しみ、家集『金槐和歌集』を編むなど、京風文化の摂取に積極的で、また後鳥羽上皇とも親密な関係にあった。このため、実朝の死は朝幕関係に大きな影響をもたらすことになり、一二二二年（承久三）には、後鳥羽上皇が、二代執権北条義時追討の命令を発して挙兵し、承久の乱が起こった。戦いは幕府軍の勝利で終結したが、御家人たちの結束を訴えた、政子の呼びかけは有名である。

一二二五年（嘉禄元）に北条政子が死去すると、三代執権北条泰時（義時の子）は、元服させた藤原頼経を将軍に任

官させるとともに将軍御所を大倉から宇都宮辻子に移した。泰時は、最初の武家の法典である御成敗式目（貞永式目）の制定や、和賀江嶋の築港の支援、巨福呂坂や朝夷奈切通の整備などを行った。泰時の政治の特色は、執権の補佐役である連署をおき、有力御家人や実務官僚十一人を評定衆として重要政務や裁判の判決にあたらせるなど、合議制を採用したことにあつた（執権政治）。孫の五代執権北条時頼も、泰時の政治をうけ継ぎ、裁判の迅速化のために引付衆をおいたが、一方で、一二四七年（宝治元）、有力御家人の三浦泰村を滅ぼすなどして（宝治合戦）、その政治は、しだいに北条氏独裁の傾向を帯びるようになっていった。また時頼は、藤原（摂家）将軍をかえて、後嵯峨上皇の皇子宗尊親王を将

軍にむかえた。それ以後、幕府は滅亡まで親王を将軍とした。

八代執権北条時宗（時頼の子）の時代には、一二七四年

（文永十一）と一二八一年（弘安四）の二度にわたり、元（モンゴル）の軍隊が日本列島に襲来した（文永・弘安の役）。

モンゴル軍は、二度とも撤退していったが、その合戦の様子は『蒙古襲来絵巻』に詳しく描かれている。なお第一回モン

ゴル襲来の翌年、時宗は元の使者である杜世忠らを龍口（現在の藤沢市）で斬っている。この時期、ますます独裁色を強

めていた北条氏は、幕府の重要政務を、得宗である時宗を中心とした「深秘の沙汰」「寄合」と呼ばれる会議で決定する

ようになっていた（得宗専制政治）。時宗が死去し、若年の

九代執権貞時があとを継ぐと、貞時の外戚で、積極的な政治

改革を進めていた安達泰盛と貞時（得宗家）の家臣である平

頼綱が対立し、一二八五年（弘安八）、頼綱により泰盛が滅

ぼされるという霜月騒動がおこった。しかし一二九三年（正

応六）、成長した貞時によって、頼綱も滅ぼされた。

鎌倉時代の後半には、三度目のモンゴル襲来に備えた西

国の防備などのために、御家人の経済負担が増したため、御

家人の間に幕府への不満が高まった。一三三三年（元弘三）

に、後醍醐天皇の倒幕運動に呼応して、足利高氏（のち尊氏）

の子・千寿王を擁した新田義貞らにより鎌倉は攻撃され、洲

崎や極楽寺坂での激しい攻防戦のちに、得宗の十四代執権

北条高時（貞時の子）ら北条氏の一門と家臣が自害して鎌

倉は陥落した。京都では、六波羅探題が足利高氏によって攻撃された。こうして鎌倉幕府は滅亡した。

紀行文『東関紀行』には、二階堂と呼ばれた永福寺や鶴岡

八幡宮、大仏などについての記述が見られる。また、東の六

浦、南の小坪、西の稲村ヶ崎、北の山内が鎌倉の四境とさ

れ、いわゆる七口と呼ばれる切通（極楽寺、大仏、仮粧坂、

巨福呂坂、朝夷奈、名越、亀ヶ谷坂）が出入口として利用さ

れた。

鎌倉の海岸部は、紀行文『海道記』に、由比ヶ浜に「数百

艘の船がつながれていて、近江の大津浦のようである」とか、

また「千万の家が軒を並べていることから、木津・宇治・桂

の三川が合流する大淀渡のようである」などと記されており、繁栄していた様子がうかがわれる。一二三二（貞永元）の和賀江嶋の築港により、ますます海上交易は盛んに行われるようになった。

中国大陸から伝えられた禅宗は、武家社会に広く受容さ

れた。臨済宗を伝えた栄西は、北条政子の発願によ

り建立された壽福寺の開山になっている。中国大陸出身の渡

来僧も鎌倉で活動しており、蘭溪道隆は北条時頼が建立し

た建長寺の開山に、無学祖元は北条時宗が建立した円覚寺の

開山になっている。

また、日蓮宗を開いた日蓮は、一二六〇年（文応元）に、

法華経の信仰や念仏の禁止による国土の安穏を説いた

『立正安国論』を北条時頼に提出したが、その献策は幕府

に受け入れられなかった。



建長寺の三解脱門：楼上には五百羅漢などを安置している。

五代執権北条時頼の寄進でできた梵鐘（国主）



円覚寺の山門：八代執権北条時宗が建立。

仏殿の天井絵：守屋多々志画伯の

「白龍の図」



☆ 参考文献 ☆

鎌倉観光文化検定公式テキスト 鎌倉春秋社

源頼朝 東国が生んだ武家の貴公子 山川出版社

PCウィキペディアより

文責 清藤 孝